

学習指導要領改訂の趣旨を踏まえた 学習評価の進め方

小学校 体育科

この資料は、平成29年改訂学習指導要領（以下、学習指導要領）に基づく学習評価を円滑に進めていくための手引きとして、国立教育政策研究所の「『指導と評価の一体化』のための学習評価に関する参考資料」（以下、「参考資料」）の考え方を基に、佐賀県教育センターが作成したものです。各学校における、指導と評価の一体化に向けた取組の推進にぜひお役立てください。

目次

1	学習評価の基本的な考え方	1
2	学習評価の観点	1
3	小学校体育科の教科目標	2
4	小学校体育科における評価の観点及びその趣旨	3
5	小学校体育科における観点ごとの評価規準作成及び見取りのポイント	4
6	小学校体育科における「内容のまとめり」	6
7	小学校体育科における学習評価の進め方	7
8	小学校体育科における評価の事例	8
9	Q & A	20

1 学習評価の基本的な考え方

○学習評価とは

児童生徒の資質・能力を育成するために、目標に照らして児童生徒一人一人の学習状況を的確に把握すること

○学習評価を行う上で重要なポイント

- ① 児童生徒の学習改善につながるものにしていくこと
- ② 教師の指導改善につながるものにしていくこと
- ③ これまで慣行として行われてきたことでも、必要性・妥当性が認められないものは見直していくこと

学習評価を行うに当たっては、児童生徒一人一人の資質・能力を育成できるようにすることが大前提です。そのためには、児童生徒の進歩の状況や教科等の目標の実現状況を適切に把握することが必要です。把握した内容は、児童生徒にフィードバックして児童生徒の学習改善につなげられるようにし、教師は自身の指導改善につなげます。このことなくして児童生徒一人一人の資質・能力の育成は望めません。つまり、学習評価を行う上で、「普段の授業の不断の見直し」が不可欠と言えます。

○学習評価の機能

指導に生かす評価・・・児童生徒一人一人の学習状況を把握し、児童生徒の学習改善や教師の指導改善につなげるための評価のこと

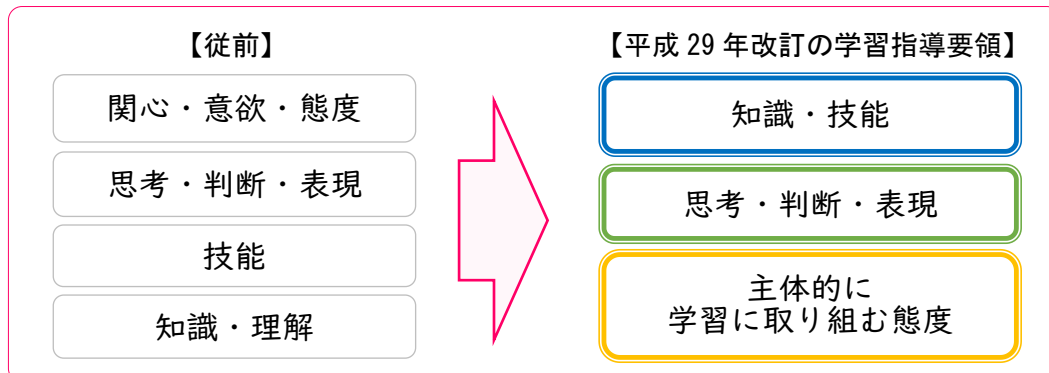
指導に生かす評価の場面は、随時存在します。児童生徒の学習状況を把握し、「おおむね満足できる」状況(B)以上になることを目指して、必要な指導を適宜行います。

記録に残す評価・・・観点別学習状況の評価を総括する際の資料となるよう、学習状況を記録する評価のこと

記録に残す評価の場面は、毎時間設定する必要はありません。児童生徒全員の評価を記録に残す場面を精選することが重要です。単元や題材のまとまりの中で、評価規準に照らして、児童生徒の観点別学習状況を把握し、記録します。

2 学習評価の観点

学習指導要領では、各教科等の目標や内容が、育成を目指す資質・能力の三つの柱を基に整理されました。目標や内容の整理を踏まえ、小・中・高等学校の各教科を通じて、評価の観点も4観点から3観点到整理されました(下図参照)。



3 小学校体育科の教科目標

学習指導要領において、全ての教科の目標は、(1)「知識及び技能」、(2)「思考力、判断力、表現力等」、(3)「学びに向かう力、人間性等」の三つの柱で整理されました。小学校体育科の目標は次のとおりです。

体育や保健の見方・考え方を働かせ、課題を見付け、その解決に向けた学習過程を通して、心と体を一体として捉え、生涯にわたって心身の健康を保持増進し豊かなスポーツライフを実現するための資質・能力を次のとおり育成することを目指す。	
(1) その特性に応じた各種の運動の行い方及び身近な生活における健康・安全について理解するとともに、基本的な動きや技能を身に付けるようにする。	知識及び技能
(2) 運動や健康についての自己の課題を見付け、その解決に向けて思考し判断するとともに、他者に伝える力を養う。	思考力、判断力、表現力等
(3) 運動に親しむとともに健康の保持増進と体力の向上を目指し、楽しく明るい生活を営む態度を養う。	学びに向かう力、人間性等 ※

※(3)の「学びに向かう力、人間性等」には、①「主体的に学習に取り組む態度」として観点別学習状況の評価を通じて見取ることができる部分と、②観点別学習状況の評価や評定にはなじまず、こうした評価では示しきれない部分があるとされています。そのため、評価の観点は、「主体的に学習に取り組む態度」と示されています。

体育や保健の見方・考え方について、学習指導要領解説では以下のように述べられています。

	体育の見方・考え方	保健の見方・考え方
学習指導要領解説	・生涯にわたる豊かなスポーツライフを実現する観点を踏まえ、「運動やスポーツを、その価値や特性に着目して、楽しさや喜びとともに体力の向上に果たす役割の視点から捉え、自己の適性等に応じた『する・みる・支える・知る』の多様な関わり方と関連付けること」であると考えられる。	・疾病や傷害を防止するとともに、生活の質や生きがいを重視した健康に関する観点を踏まえ、「個人及び社会生活における課題や情報を、健康や安全に関する原則や概念に着目して捉え、疾病等のリスクの軽減や生活の質の向上、健康を支える環境づくりと関連付けること」であると考えられる。
見方・考え方の概要	・運動やスポーツは特性に応じた楽しさや喜びがあることに着目すること。 ・運動やスポーツは体力の向上につながっていることに着目すること。 ・「すること」だけでなく「みること」、「支えること」、「知ること」など、自己の適性等に応じて、運動やスポーツとの多様な関わり方について考えること。	・身近な生活における課題や情報を、保健領域で学習する原則及び概念等に着目して捉ええ、病気やけがのリスク軽減に関連付けること。 ・身近な生活における課題や情報を、保健領域で学習する原則及び概念等に着目して捉ええ、心身の保持増進に関連付けること。

4 小学校体育科における評価の観点及びその趣旨

小学校体育科における評価の観点及びその趣旨は、次のとおりです。評価の観点の趣旨は、学年ごとに異なります。

(1) 評価の観点及びその趣旨

観点	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
観 点 の 趣 旨	・ 各種の運動の行い方について理解しているとともに、基本的な動きや技能を身に付けている。 ・ 身近な生活における健康・安全について実践的に理解しているとともに、基本的な技能を身に付けている。	・ 自己の運動の課題を見付け、その解決のための活動を工夫しているとともに、それらを他者に伝えている。 ・ 身近な生活における健康に関する課題を見付け、その解決を目指して思考し判断しているとともに、それらを他者に伝えている。	・ 運動の楽しさや喜びを味わうことができるよう、運動に進んで取り組もうとしている。 ・ 健康を大切にし、自己の健康の保持増進についての学習に進んで取り組もうとしている。

(2) 学年別の評価の観点の趣旨

観点	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
第1学年及び第2学年	・ 各種の運動遊びの行い方について知っているとともに、各種の運動遊びの基本的な動きを身に付けている。	・ 各種の運動遊びの行い方を工夫しているとともに、考えたことを他者に伝えている。	・ 各種の運動遊びの楽しさに触れることができるよう、各種の運動遊びに進んで取り組もうとしている。
第3学年及び第4学年	・ 各種の運動の行い方について知っているとともに、基本的な動きや技能を身に付けている。 ・ 健康で安全な生活や体の発育・発達について理解している。	・ 自己の運動の課題を見付け、その解決のための活動を工夫しているとともに、考えたことを他者に伝えている。 ・ 身近な生活における健康の課題を見付け、その解決のための方法を工夫しているとともに、考えたことを他者に伝えている。	・ 各種の運動の楽しさや喜びに触れることができるよう、各種の運動に進んで取り組もうとしている。 ・ 健康の大切さに気付き、自己の健康の保持増進についての学習に進んで取り組もうとしている。
第5学年及び第6学年	・ 各種の運動の行い方について理解しているとともに、各種の運動の特性に応じた基本的な技能を身に付けている。 ・ 心の健康やけがの防止、病気の予防について理解しているとともに、健康で安全な生活を営むための技能を身に付けている。	・ 自己やグループの運動の課題を見付け、その解決のための活動を工夫しているとともに、自己や仲間の工夫したことや考えたことを他者に伝えている。 ・ 身近な健康に関する課題を見付け、その解決のための方法や活動を工夫しているとともに、自己や仲間の考えたことを他者に伝えている。	・ 各種の運動の楽しさや喜びを味わうことができるよう、各種の運動に積極的に取り組もうとしている。 ・ 健康・安全の大切さに気付き、自己の健康の保持増進や回復についての学習に進んで取り組もうとしている。

5 小学校体育科における観点ごとの評価規準作成及び見取りのポイント

観点	観点ごとの評価規準作成のポイント(◆)及び見取りのポイント(・)
知識・技能	●運動領域 ・評価方法の例として、主に授業時の観察、学習カード、ICT の活用等が考えられます。 ・知識と技能それぞれの見取り方については、低学年段階では、課題となる動きが身に付いている児童は、その運動の行い方、特に動きのこつやポイントを理解しているものとして見取ることができます。それ以外の児童については、観察や学習カードの記述等はその気付きや理解が認められる場合は知識に関する理解が得られているものと捉えることとします。 ・中学年以降は、技能については観察や ICT を用いて見取るとともに、運動の行い方については話合いの場面での発言や学習カードの記述内容を基に、習得状況を見取っていきます。 ◆「知識」については、文末を「～している」として、評価規準を作成します。 ◆「技能」については、文末を「～できる」として、評価規準を作成します。 【「十分満足できる姿」の設定について】 ・知識においては、運動遊びの行い方について、より詳しく言ったり書いたりしている姿や、実際に正確に行っている姿で見取ることが想定されます。 ・技能においては、連続してできる、滑らかにできる、安定してできるなど、より高度なものができる姿で見取ることが想定されます。 ●保健領域 ・保健領域の「知識」は、身近な生活における課題の解決に役立つ基礎的な事項であり、健康や安全に関する原則や概念です。そこでは、学習の過程を通した知識の習得状況について評価するとともに、他の学習や生活場面でも活用できる程度に原則や概念を理解したかを評価します。 ・保健領域の「技能」は、第5学年及び第6学年における「心の健康」「けがの防止」に位置付けています。そこでは、知識として学んだことを「～について自らできる簡単な対処（や手当）ができる」状況で評価します。 【「十分満足できる姿」の設定について】 ・「おおむね満足できる姿」に加えて、分かったことや新たな気付き等を言ったり書いたりしている姿などが想定されます。
思考・判断・表現	●運動領域 ・評価方法の例として、授業時の観察、学習カードの活用、聞き取りなどが考えられます。 ・思考・判断・表現の評価では、各領域の特性を踏まえ、児童が自己の課題を見付けること、自己の課題に応じて練習の仕方などを選ぶこと、思考し判断したことを言葉や文章及び動作などで表したり友達や教師などに理由を添えて伝えたりすることを評価します。 ・教師は、児童が自己の課題を見付けて活動を工夫できるように、運動する場、補助的な運動や練習方法、作戦例の提示等を授業で取り上げる必要があります。 ・また、自己の課題について思考し判断したことを学習カードに書くこと、友達と話し合うこと、発表することや身振りで表現することなど、友達や教師に伝える活動を授業に取り入れる必要があります。 ◆文末を「～している」として、評価規準を作成します。 【「十分満足できる姿」の設定について】 ・思考・判断においては、設定された活動を基に、自分なりに更に工夫しようとしていることが行動や言葉として表出される姿で見取ることが想定されます。

思考・判断・表現	・表現においては、友達のよい動きや自分が工夫した動きを、言葉や動作、身振りなど多様な表現方法を用いて友達や教師に伝えたり、カードに書いたりする姿で見取ることが想定されます。 ●保健領域 ・保健領域の「思考・判断・表現」は、健康や安全の身近な生活における課題を見付け、その解決に向けて取り組む学習過程において、自分や仲間が直面する課題を比較、分類、整理することや、複数の解決方法を試し、その妥当性を評価し、他者との対話を通して、よりよい解決策を見いだしている状況进行评估します。 ・また、思考し判断したことを、言葉や文章及び動作などで表したり、仲間や教師などに理由を添えて伝えたりしている状況进行评估します。 【「十分満足できる姿」の設定について】 ・「おおむね満足できる姿」に加えて、具体的な事実や経験との関連性に目を向けて考えている姿や、理由を明確にして表現している姿などが想定されます。
主体的に学習に取り組む態度	●運動領域 ・評価方法の例として、授業時の観察、学習カードの活用、ICTの活用、相互評価（見せ合いの後の発表等）、聞き取りなどが考えられます。 ・主体的に学習に取り組む態度の評価では、それぞれの運動が有する特性や魅力に応じて、その楽しさや喜びを味わうとともに、公正に取り組む、互いに協力する、自己の役割を果たす、仲間の考えや取組を認める、安全に留意するなどの態度について、授業の中で指導したことを評価していきます。 ・教師は実際の授業の中で、児童が積極的に取り組むための手立てを考えたり、互いに認め合うための相互評価の場面を設定したり、安全に留意する場を指導したりするなど、具体的な場面を捉えて指導していきます。 ◆「安全」に関する内容は、文末を「～している」として、評価規準を作成します。 ◆安全以外に関する内容は、文末を「～しようとしている」として、評価規準を作成します。 【「十分満足できる姿」の設定について】 ・愛好的な態度においては、課題の解決に向けて、意欲的に取り組もうとしている姿で見取ることが想定されます。 ・公正や協力に関する態度においては、公平・公正な態度と友達をよりよく支えようとしている姿で見取ることが想定されます。 ・責任や参画に関する態度においては、グループでの活動等で生じる自分の役割を十分に果たそうとしている姿で見取ることが想定されます。 ・共生に関する態度においては、自分と課題の解決が異なる場合においても、違いを認め、自分事として引き取ろうとしている姿で見取ることが想定されます（低学年においては内容に示されていません）。 ・健康・安全に関する態度においては、自分の安全だけでなく、友達の安全の確保にも留意し、行動する姿で見取ることが想定されます。 ●保健領域 ◆保健領域では、他の各教科等と同様に、「学びに向かう力、人間性等」について目標において全体としてまとめて示し、指導事項のまとまりごとに内容を示さないこと基本としています。 ◆「主体的に学習に取り組む態度」の評価は、育成に時間がかかる点に留意し、1時間ごとの画一的な評価ではなく、単元を通して見取っていくことが重要です。 【「十分満足できる姿」の設定について】 ・「おおむね満足できる姿」に加えて、新しい資料（ICTや学校図書等）を見付けたり、友達の考えをさらに知ろうと質問したりしようとしている姿が想定されます。

6 小学校体育科における「内容のまとめり」

小学校体育科の内容は、運動領域と保健領域から構成されています。運動領域が内容の多くを占めていますが、保健領域については第3学年・第4学年及び第5学年・第6学年の内容の一部として取り上げられています。

小学校体育科における「内容のまとめり」は、次のとおりです。

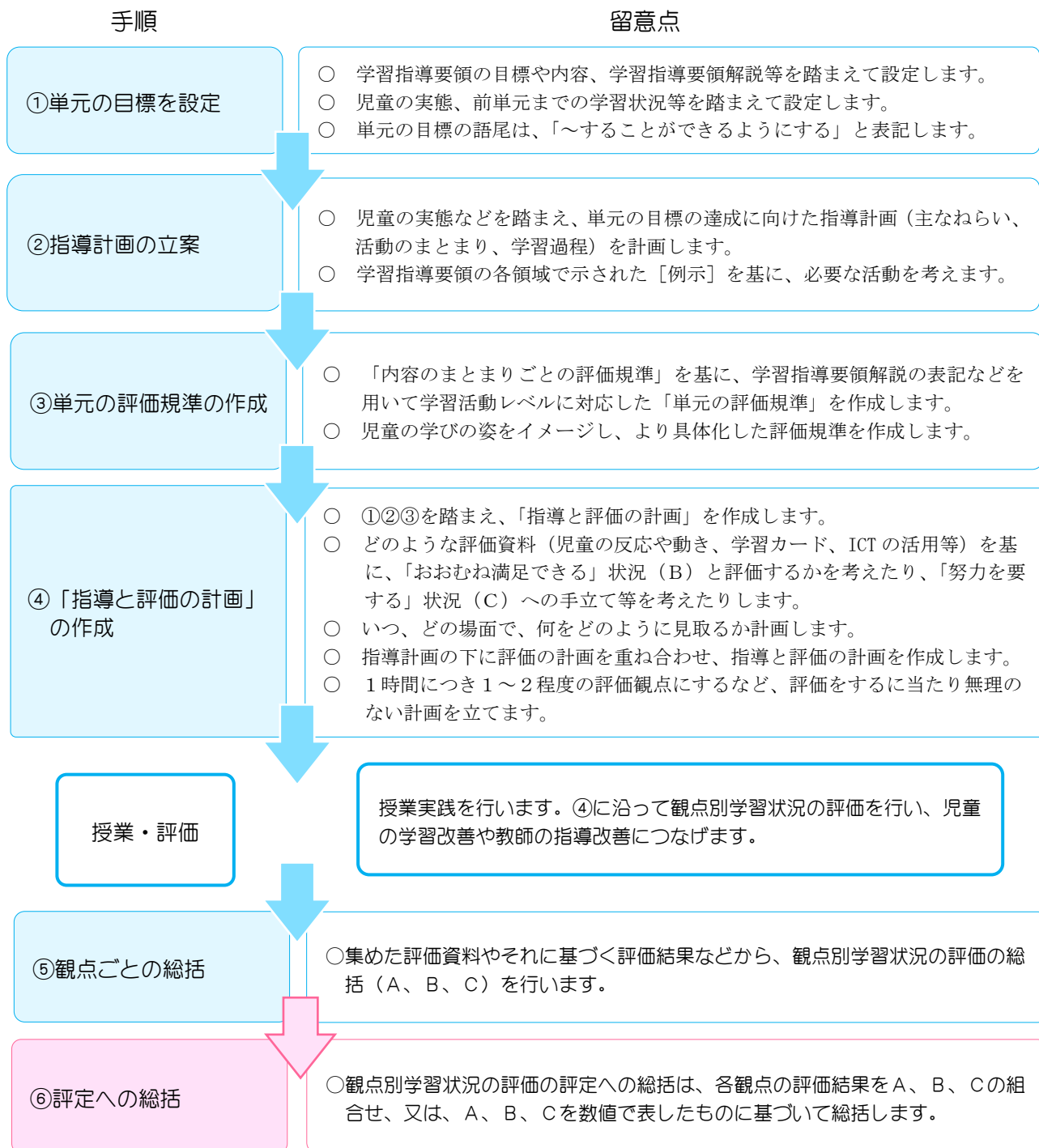
学年	第1学年及び第2学年	第3学年及び第4学年	第5学年及び第6学年
運動領域	A 体づくりの運動遊び B 器械・器具を使つての運動遊び C 走・跳の運動遊び D 水遊び E ゲーム F 表現リズム遊び	A 体づくり運動 B 器械運動 C 走・跳の運動 D 水泳運動 E ゲーム F 表現運動	A 体づくり運動 B 器械運動 C 陸上運動 D 水泳運動 E ボール運動 F 表現運動
保健領域		G 保健(1)健康な生活 G 保健(2)体の発育・発達	G 保健(1)心の健康 G 保健(2)けがの防止 G 保健(3)病気の予防

観点別学習状況の評価を行う際は、学習指導要領の目標や内容を踏まえ、年間の指導と評価の計画を確認することが重要です。その上で、「内容のまとめりごとの評価規準」の考え方等を踏まえて進めることが考えられます。「参考資料 (pp99～110)」において、「内容のまとめりごとの評価規準 (例)」が示されており、参考にすることができます。

運動領域の「内容のまとめり」は、基本的には数種類の運動を含んでいます。例えば、第3学年及び第4学年における「走・跳の運動」の内容のまとめりは、「かけっこ・リレー」「小型ハードル走」「幅跳び」「高跳び」の4つの運動で構成されています。「内容」としてはまとまっていますが、一つ一つの運動の特性には違いがあります。この一つ一つの運動に、特性に触れながら集中的に取り組む学びの時間を、小学校体育においては単元として考えることができます。

7 小学校体育科における学習評価の進め方

単元における観点別学習状況の評価の進め方（手順）は、基本的に次のような流れになります。観点別学習状況の評価を行う際は、下の進め方（手順）の前に、まず、学習指導要領の目標や内容を踏まえ、年間の指導と評価の計画を確認することが重要です。



8 小学校体育科における評価の事例

事例1 キーワード…運動領域における指導と評価の計画から評価の総括まで

単元名 「水泳運動」(第4学年)



1 指導と評価のための具体的な手順

【手順1】単元の目標を設定する

- ・学習指導要領に示された各学年、各領域の内容の言葉を参考に設定します。

	知識及び技能	思考力、判断力、表現力等	学びに向かう力、人間性等
学習指導要領の「水泳運動」の内容	(1) 次の運動の楽しさや喜びに触れ、その行い方を知るとともに、その動きを身に付けること。 ア 浮いて進む運動では、け伸びや初歩的な泳ぎをすること。 イ もぐる・浮く運動では、息を止めたり吐いたりしながら、いろいろなもぐり方や浮き方をすること。	(2) 自己の能力に適した課題を見付け、水の中での動きを身に付けるための活動を工夫するとともに、考えたことを友達に伝えること。	(3) 運動に進んで取り組み、きまりを守り誰とでも仲良く運動をしたり、友達の考えを認めたり、水泳運動の心得を守って安全に気を付けたりすること。

・取り組む運動を整理し、語尾を「～することができるようにする」と表記すると、単元の目標として示すことができます。

単元の目標	(1) 浮いて進む運動やもぐる・浮く運動の行い方を知るとともに、その動きを身に付けることができるようにする。	(2) 自己の能力に適した課題を見付け、水の中での動きを身に付けるための活動を工夫することと、考えたことを友達に伝えることができるようにする。	(3) 水泳運動に進んで取り組み、きまりを守り誰とでも仲良く運動をしたり、友達の考えを認めたり、水泳運動の心得を守って安全に気を付けたりすることができるようにする。
-------	---	--	---

「単元の目標」に類似した「内容のまとまりごとの評価規準」があります。それはp.6に示した「内容のまとまり」ごとの評価規準です。ただし、内容のまとまりにはいくつかの運動を含んでいるため、今回は、対象とする運動に、より焦点化した「単元の目標」を示しています。

【手順２】指導計画を立案する（具体的には、p. 10 に示しています。）

- ・児童の実態などを踏まえ、単元の目標の達成に向けた指導計画（主なねらい、活動のまとまり、学習過程）を計画します。
- ・指導する内容の順序や指導の時間等を考慮し、無理のない計画にします。
- ・学習指導要領の各領域で示された「例示」を基に、活動を考えることができます。

【手順３】単元の評価規準を作成する

- ・観点の趣旨を基に、観点ごとの目標を更に細かく分けて、評価規準を設定します。
- ・「単元の目標」と指導計画における児童の活動を考慮し、児童の学びの姿としてより具体化した評価規準を作成します。

	知識及び技能	思考力、判断力、表現力等	主体的に学習に取り組む態度
観 点 の 趣 旨 ポ イ ン ト	・「その行い方を知る」と示した部分が「知識」に該当する。 ・「動きを身に付ける」と示した部分が「技能」に該当する。	・「～課題を見付ける」と示した部分及び「～工夫する」と示した部分が「思考・判断」に該当する。 ・「～伝える」と示した部分が「表現」に該当する。	・「学びに向かう力、人間性等」に記載されている全てが「主体的に学習に取り組む態度」として該当する。
評 価 規 準 の 示 し 方	○知識の評価規準 ○技能の評価規準 二つ区別して、示す	○思考・判断の評価規準 ○表現の評価規準 二つ区別して、示す	・愛好的態度 ・公正・協力 ・責任・参画 ・共生 ・健康・安全 項目ごとに表示
評 価 規 準	知…「～している」 技…「～できる」	思・判・表…「～している」	健康・安全…「～している」 その他の項目 …「～しようとしている」
	①浮いて進む運動やもぐる・浮く運動の行い方について、言ったり書いたりしている。 ②プールの底や壁を蹴って、け伸びをすることができる。 ③呼吸をしながら初歩的な泳ぎをすることができる。 ④呼吸を調整しながらいろいろな浮き方やもぐり方をすることができる。	①姿勢や呼吸の仕方など自己の能力に適した課題を見付け、その課題の解決のための活動を選んでいる。 ②友達のよい動きや課題の解決のための動きのポイントを言葉や動作で伝えている。 ③いろいろなもぐり方や浮き方を友達に紹介したり、友達のよい動きに注目したり、まねしたりしている。	①水泳運動に進んで取り組もうとしている。 ②水泳運動のきまりを守り、誰とでも仲良く励まし合おうとしている。 ③用具の準備や片付けを友達と一緒にしようとしている。 ④友達の考えを認めようとしている。 ⑤水泳運動の心得を守って安全を確かめている。

【手順4】指導と評価の計画を作成する

- ・単元計画のうち、いつ、どの場面で、何をどのように見取るのか計画を立てます。
- ・1時間につき1～2程度の評価観点にするなど、評価をするに当たり、無理のない計画を立てます。
- ・設定した評価はあくまで重点的に見るためであり、個別の評価は必要に応じて行います。

時間	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
主なねらい	水泳運動の楽しさや喜びを味わい、4年での学習に意欲を高める。	いろいろなもぐり方や浮き方をすることで、全身の力を抜いて浮いたり、水中で息を止めたり吐いたりすることができる。		体を一直線に伸ばしたけ伸びの姿勢で進んだり、呼吸をしながら手や足を動かして初歩的な泳ぎをしたりすることができる。					チーム対抗戦の中で、自分のできるようになった泳ぎを披露することができる。	
学習過程	1 水泳運動の心得の確認 2 準備運動、水慣れ(もぐる・浮く運動、浮いて進む運動) ・水中じゃんけん、バブリング 等 ・床にタッチ、変身浮き、け伸び、ばた足泳ぎ 等 3 振り返り ・今後の学習計画を立て、課題を設定する。	1 準備運動、水慣れ 2 もぐる・浮く運動(いろいろな浮き方やもぐり方をする。) 3 変身浮き(一人、バディ、グループ) ・もぐり方をまねし合い ・だるま浮きや背浮き競争 ・ボビングリレーや競争 等 4 「浮いて進む運動」を授業終末に取り入れる。 ・け伸びリレーや競争 ・ばた足リレーやばた足ずもう 等 5 振り返り ・友達のよかったところや動きのポイント等を確認する。		1 準備運動、水慣れ ・呼吸の仕方を身に付ける上で、もぐる・浮く運動を毎時間取り入れる。 2 浮いて進む運動(け伸びや初歩的な泳ぎをする。) ・体を一直線にしたけ伸びになるよう練習する。 ・補助具を使って、呼吸をしながら手や足を動かして進む泳ぎをする。 ・補助具を使って、仰向け泳ぎをする。 ・呼吸を伴わない泳ぎをしたり、呼吸をしながら手や足を動かして進んだりする。(ばた足泳ぎやかえる足泳ぎ等) 3 振り返り ・友達のよかったところや動きのポイント等を確認する。					1 準備運動、水慣れ 2 チーム対抗戦をどのような種目で行えばみんな楽しめるか考える。 3 チームごとに練習をする。 4 チーム対抗戦を楽しむ。 5 振り返り ・友達のよさや自分の成長等を確認する。	
	知技	① 観・力		④ 観・力			② ICT	① 観・力		② 観
思考			③ 観・力		② 観・力		① 観・力			
態度	② 観・力	⑤ 観		① 観				④ 観・力		③ 観

観…観察

力…学習カード

ICT…動画の撮影

【手順5】本時の展開を構想する（例：第7時）

分	●学習内容・活動（・予想される児童の反応）	指導上の留意点（○指導、□支援・配慮 ◆評価規準）
ほぐし	●準備運動・シャワーを行う。 ●バディ確認・水慣れの運動を行う。	○準備運動で、体の調子を確認するように促す。 ○もぐる・浮く運動を取り入れ、呼吸のリズムや姿勢についてバディで確認し合うことを助言する。
課題の設定	●本時の「共通のめあて」を確認する。 バディと一緒に、出世魚チャレンジを楽しもう ●自己に適した目標をもち、バディで課題達成に取り組む。 ・チャレンジする内容と目標を決め、チャレンジする。 【チャレンジする内容例】 ・距離にチャレンジ（一呼吸で、足を着かずに、等）。 ・速さにチャレンジ（自己ベスト、友達との競争 等）。 ・美しさにチャレンジ（姿勢、水をかく手の動き、呼吸の仕方 等）。 ・アドバイスにチャレンジ（補助時、見学者）。 ・互いの動きを見合い、よさや改善点をアドバイスタイムで伝える。  ●全体交流を行う。 ・チャレンジ成功の秘訣、よい動きのポイントを考え、みんなで共有する。 ●次の時間の課題をもつ。 ・次はチームを作って、同じようなチャレンジを楽しむことを知る。	○チャレンジする内容と目標をバディに伝えさせ、バディとして、相手の取組と目標に責任をもって協力するよう促す。 ◆姿勢や呼吸の仕方など自己の能力に適した課題を見つけ、その課題の解決のための活動を選んでいる。 ○「チャレンジタイム」→「アドバイスタイム」を1セットとし、同じチャレンジに最低5セットは挑戦するように学びの道筋を示す。アドバイスはバディや見学者からもらうようにさせる。 □友達の技術的な向上や手本にしたい学び方について目を向けることができるように、見学者用ワークシートを用意する。 ○浮いて進む運動までたどり着けていない児童については、支援方法（誰と何を使って）を提示して選ばせた上で課題の達成を図らせる。 □教師は、取り組んでいる児童の動きを止めないよう、気づきやアドバイスはバディを通して伝えるように心掛ける。 ○距離が伸びたり、よい動きをしたりしている児童を見つけ、それらをバディに伝え、称賛したりまねし合ったりするよう促す。 ○チャレンジが成功した児童を取り上げ、成功の秘訣や心掛けたことなどを紹介するよう促す。 ○振り返りの場を設定し、互いの伸びを確認したり次の時間の課題をもったりさせる。 ◆浮いて進む運動の行い方について、言ったり書いたりしている。
振り返り		
整理	●整理運動・シャワーを行う	○体調を崩している児童がいないか確認する。

2 単元の評価規準に即した児童の具体的な姿及び評価の方法の例

(1) 知識・技能

単元の評価規準	児童の具体的な姿の例及び評価の方法の例
①浮いて進む運動やもぐる・浮く運動の行い方について、言ったり書いたりしている。	・浮いて進む運動について、バランス、呼吸、姿勢の視点から気付きを言ったり書いたりしている。(観察・カード) ・色々な、もぐる・浮く運動をしようとしている。(観察)
②プールの底や壁を蹴ってけ伸びをすることができる。	・プールの底を蹴って、10秒以上のけ伸びができる。(ICT) ・プールの壁を蹴って、5m以上のけ伸びができる。(ICT)
③呼吸をしながら初歩的な泳ぎをすることができる。	・頭の上方に腕を伸ばした姿勢で、手や足をバランスよく動かして、プールの横の長さを泳ぎ切ることができる。(観察)
④呼吸を調整しながらいろいろなもぐり方や浮き方をすることができる。	・伏し浮き、だるま浮き、背浮き等の浮き方ができる。(観察・カード) ・体のいろいろな部分をプールの底につけることができる。(観察)

知識・技能の「十分満足できる姿」について

上記の姿に加え、「より詳しく」「より滑らかに」「より長い距離を」「より安定して」などの、よりよくできる姿で見取ることが想定されます。そのような姿は、教師だけでなく児童の目にもよく留まります。大切なのは、その目に留まったよさをフィードバックしていくことです。指導と評価という観点からも、よさに気付いたならば、言葉や動きにして、きちんと本人に伝えることが必要です。何がよくてよい結果を出しているのか、本人だけでなく周囲とも共有を図れるようにしておくことで、評価の意義が高まります。



知識・技能の「努力を要する」状況(C)と判断される児童への支援について

まず、その背景を把握することが大事です。「やり方が分からない」児童に対しては、資料や動画など前もって準備していたものを見る機会を設けます。友達のやり方を参考にするのも効果的です。「間違っていて思い込んでいる」児童に対しては、ICTを使って自分の動きを録画して確認させることが有効です。その際、「腕を回す大きさを見てごらん」など視点を与えると、より気付きやすくなります。

運動への恐怖心や抵抗感が大きい児童に対しては、活動の場所を壁の近くにしたり、体を浮かせるための補助具を使ったりするなど、取り組む環境を工夫する支援が大切です。また、取り組んでいる事実を褒め、自己効力感が高まるように支援します。その上で、運動の特性に触れながら「する、見る、支える、知る」の様々な関わり方ができるように工夫します。



上記の吹き出しのような評価とその指導は、記録に残す評価の場面だけでなく、該当の活動を行っているときに常に行っています。指導に生かす評価として児童の状況によって対応するとともに、記録に残す評価の場面では、全ての児童の現状を評価していきます。

(2) 思考・判断・表現

単元の評価規準	児童の具体的な姿の例及び評価の方法の例
①姿勢や呼吸の仕方など自己の能力に適した課題を見付け、その課題の解決のための活動を選んでいる。	・身に付けたいポイントや、チャレンジしたい内容を見付けて取り組んでいる。(観察・カード)
②友達のよい動きや課題の解決のための動きのポイントを言葉や動作で伝えている。	・教師の言葉、資料、友達の動きなどを参考に、泳ぎ方のポイントを言葉や動作で伝えている。(観察) ・友達の、よい学び方を褒めている(観察・カード)
③いろいろなもぐり方や浮き方を友達に紹介したり、友達のよい動きに注目したり、まねしたりしている。	・いろいろなもぐり方や浮き方に挑戦しながら、楽な姿勢の作り方、長く浮き続けられるコツなどに気付いて、発言したり、真似をしたりしている。(観察)

思考・判断・表現における「十分満足できる姿」について

上記の姿に加え、順調なステップアップ、試行錯誤の度合い、擬態語や身振りなど表現方法の多様さ等、より一層の工夫や思考の深まりが、行動や言葉として表出された姿で見取ることが想定されます。結果の見取りというより、児童の学びそのものに目を向ける必要があります。そうはいつても、教師は活動中、全体に注意を向けているので、活動の中で出てくる児童のよさを全て見取れるわけではありません。そこで、個人の振り返りがとても大事になります。技能の向上が見られた児童を褒めつつ、その因果関係を整理させたり、次の目標を書かせて理由を考えさせたりすることで、児童の思考が見えてきます。また、振り返りの際に、「バディに言われて参考になったこと」、「こんな友達に進めたいこんな練習」などを考えさせて学習カードに書かせることは、評価の補助的な資料としても役立ちます。



思考・判断・表現の「努力を要する」状況(C)と判断される児童への支援について
主に二つの場面で、支援することが考えられます。

一つは、バディとのやりとりやチームでの話し合いなど、児童が「自分の意見を他者に伝えて、考えの共有を図る場面」です。教師はやりとりに耳を傾けながら、うまく進まないバディやグループでは「どんなところがよかったの?」「何に困っているのかな?」「どうすればうまくいくのかな?」「それは、どうやるの?試してみよう」など、児童の思考が表出され、活動が促進されるよう支援します。

もう一つは、「学習カードなどに児童が自分の目標や活動の振り返りを書く場面」です。ここで想定されるのは、目標をもてない、自分の課題が分からない児童です。この場合は、まず、バディの力も借りながら、対象児童の取組や成長を本人が感じられるようにします。その上で、教師は注目させたい動きなどを資料やオノマトペなどを使い、児童がイメージしやすいように示すことが有効です。



(3) 主体的に学習に取り組む態度

単元の評価規準	児童の具体的な姿の例及び評価の方法の例
①水泳運動に進んで取り組もうとしている。	・教師の示す動きや、自分が決めた課題解決に向けて、いろいろ試したり、挑戦したりしている。(観察)
②水泳運動のきまりを守り、誰とでも仲良く励まし合おうとしている。	・順番やきまりを守り、取り組んでいる。(観察) ・バディやチームのみんなと励まし合って活動している。(観察・カード)
③用具の準備や片付けを友達と一緒にしようとしてる。	・友達と協力して準備や片付けをしたり、声を掛け合ったりして取り組んでいる。(観察)
④友達の考えを認めようとしている。	・アドバイスタイムでバディや見学者の気付きや励ましに耳を傾けている。(観察・カード)
⑤水泳運動の心得を守って安全を確かめている。	・移動や入水時に安全に気を配って活動している。(観察) ・活動ごとに、用具をちゃんと片付けている。(観察)

補助資料として、振り返りシートにおいて自己評価を行わせることも考えられます。

主体的に学習に取り組む態度における「十分満足できる姿」について

上記の姿に加え、「より率先して」、「周囲にも意識を向けて」「喜びややりがいを感じて」などの姿で見取することができます。多くの児童は、知ってすぐ（みんなで共有してすぐ）の時は意識が高いので、一定期間を置くなど、時期をずらして評価を行うことも考えられます。また教師は、「C評価」の児童には繰り返し指導を行い、改善を図り続けますが、教師と同じように友達と関わるができる児童も出てきます。そのような態度（声を掛ける、手伝う、目を配るなど）の頻度が高い児童については、その姿を「十分に満足できる姿」として参考にすることが考えられます。



主体的に学習に取り組む態度の「努力を要する」状況（C）と判断される児童への支援について

体育では他の教科と違い、「学びに向かう力、人間性等」にも身に付けさせたい内容が、運動領域ごとに明記されています。できていない場合は、指導も必要になります。特に「その運動が得意なのに、自分の活動にしか興味がもてない児童」には支援が必要です。バディの成長やチームとしての達成感を味わえるような活動の工夫が必要です。さらに、よい行動やルールを文字や絵で可視化し、できていることを褒めていくことで、意識付けを行っていきます。できていない児童の中には、「運動が苦手で意欲がわからない児童」もいます。そのような児童にこそ、バディやチームとしての活動のよさを味わわせ、様々な運動の楽しみ方（見る、知る、支える）があることに気付かせます。



3 毎時間の観点別評価の進め方

(1) 指導と評価の重点化

一時間の授業においては、多くの場合、重点的に指導する内容を絞り、指導を行っていきます。一般的に、指導した内容については、その都度児童の到達度に目を向けることが必要です。しかし体育においては、技能や主体的に学習に取り組む態度のように、習得や活用に時間が掛かる場合も想定されます。したがって、一定期間を置くなど、指導と評価の時期をずらして評価を行う場合もあり、重点的に指導する内容と本時の評価の観点が必ずしも一致するものではないことに留意する必要があります。

(2) 評価後の指導の継続と再評価の重要性

ある児童において、単元の前半に評価の機会を設定した項目がBまたはCであったものを、単元の終盤までにAまたはBとなるよう指導の充実を図ることが本来の評価の在り方です。そのため、単元の前半に評価したことをもってその観点の評価を確定することには留意が必要です。

(3) 指導と評価の計画の柔軟な運用

指導と評価の計画は、育成を目指す資質・能力と指導内容及び評価の具現化を図ることに資するものであるため、児童の実態等に応じて、適宜修正を加えながら柔軟に作成することが大切です。

4 総括的な評価の考え方

	第1時	第2時	第3時	第4時	第5時	第6時	第7時	第8時	第9時	第10時	総括
知	⑤→B		④→A			②→A	①→B		③→A		A
思			③→B		②→B		①→B				B
態	②→A	⑤→B		①→B				④→A		③→B	B

各観点における単元の評価規準を三つ設定した場合、総括すると AAA/AAB→A、ABB/BBB/BBC→B、BCC/CCC→Cとなることが想定されます。評価規準が四つ、五つの場合もこれに準じます。総括で評価がCとなるパターンも想定されますが、その場合は留意が必要です。教師は各時間でC評価と判定した児童には繰り返し継続して支援を行うはずですから、通常は児童の取組に改善が見られることが予想されます。記録を取った時Cだったから、この評価はCだと切り捨てることは、評価のための評価となってしまいます。そうではなく、支援の重点化のためにCと判断したのだが、教師や友達の支援を受けて練習した結果、自分の力でできるまで成長したというのであれば、そこをきちんと評価することが必要だと考えます。もちろん、支援や指導を続けたが、目標まで到達できなかったというのであれば、Cと判断されることも考えられます。大切なのは、児童と教師がその評価について、共有できることであり、児童自身がその評価に納得できることが一つの目安と考えられます。教師は、出来栄の評価を突き付けるのではなく、児童自身が何をどう頑張ればいいのか分かるような評価を目指していく必要があると考えます。

8 小学校体育科における評価の事例

事例2 キーワード…運動領域における「思考・判断・表現」の評価

単元名 「ベースボール型ボール運動（ティーボール）」（第5学年）



「思考・判断・表現」の評価の考え方・進め方について

児童の資質・能力を評価するというよりも、提示された場や動きについて、児童が自己の課題を見付けること、自己の課題に応じて練習の仕方などを選ぶことを評価します（思考・判断）。また、思考し判断したことを言葉及び動作などで表したり友達や教師などに理由を添えて伝えたりすることを評価します（表現）。

そこで教師は、児童がそのような思考を巡らせ、自分の思いを伝えることができるような場や方法、作戦などを提示し、試行錯誤できる時間を活動に取り入れる必要があります。

1 単元の目標

- (1) ベースボール型ゲームの行い方を理解するとともに、その技能を身に付け、簡易化されたゲームをすることができるようにする。
- (2) ルールを工夫したり、自己やチームの特徴に応じた作戦を選んだりするとともに、自己や仲間の考えたことを他者に伝えることができるようにする。
- (3) 運動に積極的に取り組み、ルールを守り助け合って運動をしたり、勝敗を受け入れたり、仲間の考えや取組を認めたり、場や用具の安全に気を配ったりすることができるようにする。

2 単元の評価規準

知識及び技能	思考力、判断力、表現力等	学びに向かう力、人間性等
①ティーボールの行い方について言ったり、書いたりしている。 ②止まったボールをフェアグラウンド内に打ち、塁間を全力で走塁することができる。 ③打球方向に移動し、捕球することができる。 ④補球する相手に向かって投げることができる。 ⑤守備の隊形をとって得点を与えることができる。	①誰もが楽しくゲームに参加できるように、コート of 広さやプレイの制限などのルールを選んでいる。 ②自己やチームの特徴に応じた作戦を選び、自己の役割を確認している。 ③守備の隊形について工夫したことを友達に伝えている。	①ゲームや練習に積極的に取り組もうとしている。 ②ルールやマナーを守り、仲間と助け合おうとしている。 ③用具の片付けなどで、分担された役割を果たそうとしている。 ④ゲームの勝敗を受け入れようとしている。 ⑤仲間の考えや取組を認めようとしている。 ⑥場の整備や用具の安全に気を配っている。

3 指導と評価の計画（8時間）

時間	1	2	3	4	5	6	7	8
主 な ね ら い	学 習 の 進 め 方 を 知 り、見通し をもつ。	投げる、捕る、 打つポイント や練習方法を 確認する。	ゲームの仕方を知り、簡単なル ールでゲームを楽しむ（ゲーム のねらい①）			対戦相手を選び、ルールや作戦 を工夫してゲームを楽しむ（ゲ ームのねらい②）		
学 習 過 程	○用具やコ ートの準 備 を す る。 ○学習の進 め方を知 る。 ・ルール ・マナー ・学習カー ドの使い 方 ○試しのゲ ームをす る。 ○ 振 り 返 り・片付 け を す る。	1 用具やコ ートの準 備 をする。 2 全体で基 礎練習を行 う。 ・バッティング ・走塁 ・捕る ・投げる 3 チームで 練習を楽し む。 4 全体で練 習方法やポ イントの確 認をする。 5 振り返り・ 片付けをす る。	1 用具やコートの準備をす る。 2 チームごとに基礎練習をす る。 3 ゲームの進め方とルールを 確認する。 ・1チーム6～7人 ・三振なし ・三角コート ・全員打って攻守交替 ・盗塁、リードなし 等 4 ゲーム1をする。 5 チームで反省する。 6 ゲーム2をする。 7 全体で学習のまとめをす る。 ・技能に差があっても誰もが 楽しめるようにするため には、何が必要かな？ ・どんなルールだと盛り上 がるかな？ 8 振り返り・片付けをする。			1 用具やコートの準備をす る。 2 チームごとに基礎練習をす る。 3 ゲームの進め方とルールを 確認する。 ・相手によってボールを指定 ・タッチしなくても、取れば アウト ・三振有り 等 4 ゲーム1をする。 ・攻めの作戦、守りの作戦を考 えチーム内で共有する。 5 チームで反省する。 6 ゲーム2をする。 7 チームで反省する。 8 全体で学習のまとめをす る。 9 振り返り・片付けをする。		
知			① 観・力	② 観察	③ 観察		④ 観察	⑤ 観察
思				③ 観・力		① 観・力		② 観・力
態	① 観・力	⑥ 観察	② 観察		④ 観察	③ 観察	⑤ 観・力	

観…観察 カ…学習カード

4 ティーボールの学びを活性化する授業展開例

(1) 場や道具の工夫

ベースボール型の運動の特徴は、攻守の時間がはっきり分かれていることです。そのため、他のボール運動よりも、ルール作りや作戦に工夫を取り入れやすく、その効果を確かめやすいという側面があります。反面、投げる、捕るといった動きが苦手な児童も多く、このような部分を克服しながら運動を楽しめるような場作り、道具の提示が教師には求められます。

苦手な児童が多いのであれば、コートを狭くし、バットを素手にし、ボールを柔らかいものにすることが考えられます。この状態をスタートにして、児童に「自分たちが楽しめるちょうどいいコートや道具ってどんなのかな」という問いをもたせてゲームを行えば、様々な改善案が期待できます。児童の思いが課題の改善につながるかどうかを試しながら、「ゲームのねらい①」で、本当にそうなるのか意識してゲームに取り組ませます。

【場作りや使用する道具等で工夫できること】

○ボールの硬さ・大きさ

- ・柔らかく大きめのボールは打ってもあまり飛ばず、キャッチしやすい

○バットの種類

- ・プラスチックバット ・ラケット ・素手

○アウトの方法

- ・捕球した人も含めてチーム全員がサークルに集合してアウトコールする
- ・ベースに待ち構えた人が送球されたボールをキャッチする

○コートの広さ

- ・三角ベース → ダイヤモンド
- ・塁間の距離（10 m → 15 m）

(2) 作戦の工夫

作戦には、攻撃の作戦と守備の作戦があります。教師は、児童個々の強みが、チームの中でよりよく生かされるような作戦を考えるように助言します。

もう一つ、相手へ制限を加えたり、チームのみんなが活躍したりできるように、毎時間のルール確認を活用するということも考えられます。例えば、「打つとき、一人だけラケットを使える」などのルールを考え、学級全体の同意を得て成立させるといったものです。このようなルール作りの基でゲームを行えば、状況や場面に応じた思考を促すことができ、効果的な作戦を生み出す機会となります。うまくいけば、ゲームとして盛り上がり、その後のルールとして定着することも考えられます。このようなルールの提示は、ゲームが始まる前のルール確認の場においてのみ認めるようにします。自分たちのチームだけでなく、他のチームにもメリットがあることをきちんと伝えることを前提にすれば、運動の特性を踏まえた思考の深まりが期待できます。

【作戦の例】

○攻撃の作戦

- ・人のいないところを狙って打つ
- ・打球がよく飛ぶAくんが打つ前に、走るのが速いBくんという打順にする

○守備の作戦

- ・内野を守る人を増やす
- ・捕る人以外は真っ先にサークルに動き出す

○相手に制限を加えたり、みんなが活躍したりするためのルールの提示

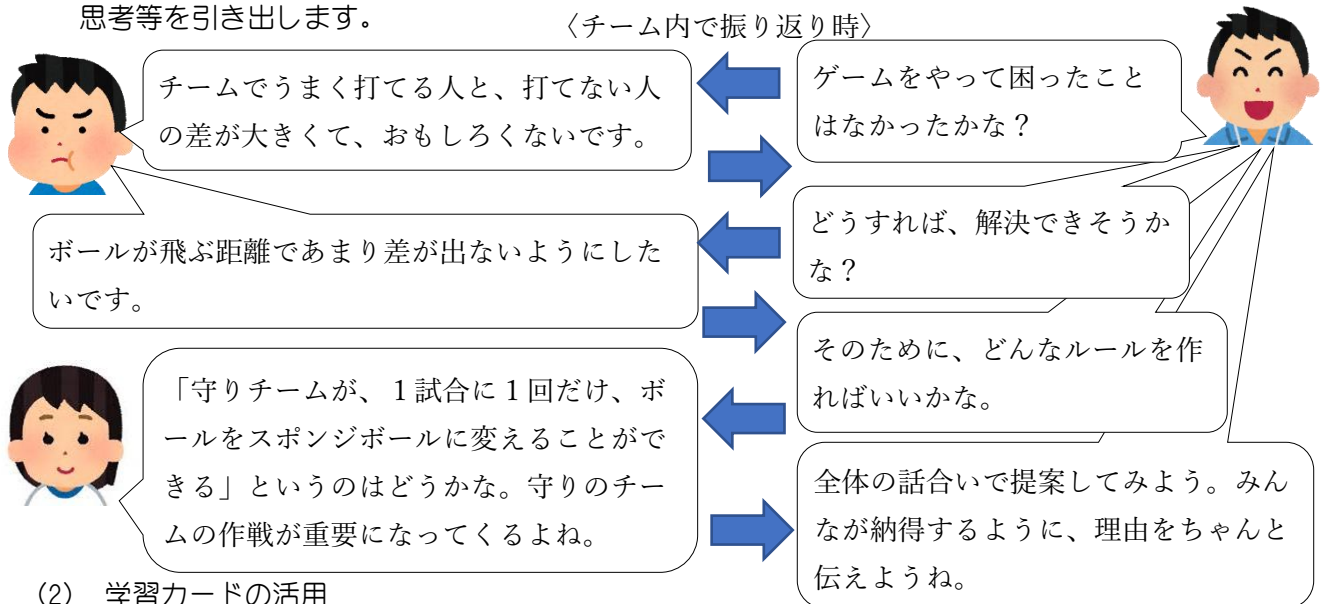
- ・「打つとき、一人だけラケットを使える」というルールの提示
- ・「1 イニング中、守備側は一人にだけスポンジボールに変えることができる」というルールの提示

5 観点別学習状況の評価の進め方～「思考・判断・表現」の指導の工夫と評価の方法について

(1) 授業時の観察

- ・授業時の観察を基に、児童のつづやきやチーム内での言葉を把握して、意図的に発問し、児童の思考等を引き出します。

〈チーム内で振り返り時〉



(2) 学習カードの活用

- ・学習カードは、個人の目標や振り返りを書くワークシートになり得るもの（以下、ワークシート）と、チームで作戦を共有するための作戦ボードになり得るもの（以下、作戦ボード）と、主に二つが考えられます。ワークシートには、参考とする資料を付け、自分の考えを記述できるスペースが必要です。作戦ボードは、ホワイトボードや付箋紙、マグネットなどを使い、容易に動かしたり修正したりできるようにしておくと、児童の思考の活性化を図れます。

守備の作戦にネーミングさせたり、どのようなよさがあるか問い掛けたりします。

根拠をもって決めているか確認します。自分たちのよさや特徴に気付いていない場合は、教師が助言します。

【作戦ボードを活用した指導と評価の例】

ティール	チーム名	ホークス
11月 8日	相手	ジャイアンツ

【めあて】
チームの全員がかつやくできるようにする

打つ順番

順	名前	1回	2回	3回
1	ともき	○	△	○
2	いくと	◎	◎	○
3	さえ	△	○	○
4	のぞみ	○	△	△
5	ゆうき	△	△	△
6	たつや	○	○	○
7	ともよ	△	△	△

攻撃の作戦
ホームランを打てるいくとさんの前に、足の速いともきくんを入れる。思いつきり打とうとすると失敗するから、苦手な人は、ボールに当てることをまず考える。

守備の作戦
内野は横一列に守って、外野は足の速いともき君に任せる。ボールが自分のところに来なくても、アウトサークルに入る動きを早くする。

結果 7 7

解決したいこと
ともよさんが、全然打てなくて、あきらめているから、何とかしたい。

解決するために
打つのが苦手な人が、ラケットで打てるようなルールを考えてみんなに認めてもらう。

書き込んだり、動かしたりする姿を見て、意図を問い掛けます。

誰の意見を基にまとめたのか、後で聞き取ることも可能です。

【ワークシートの記述に対する教師のコメント例】

作戦ボードがある場合、ワークシートの欄を「めあて」と「振り返り」程度にすると、児童の負担感は減ります。右の朱書きのように、教師は児童の記述に対しコメントを書いて指導に生かします。

ぜんぜん打てなくてくやしかった。
○○さんが打つコツを見つけたみたいだよ。聞いて、試してみたらどうでしょう。自分にあったやり方がきっとあるよ！

Q 1 保健の評価はどのように進めていけばよいですか。

A 技能に該当する部分が多い体育と、知識に該当する部分が多い保健という違いがありますが、基本的な評価の考え方は体育も保健も同じです。ただし、保健領域では内容がはっきり示されているため、ほぼ毎時間、知識の定着を見取る必要があります。授業の中で学んだことをワークシートに書かせたり、自分自身に結び付けて振り返らせたりして、児童が学んだことをアウトプットする場が必要です。

Q 2 例えば思考・判断はAだけど表現はCのように、同じ単元の同じ観点において、評価が分かれたときはどのように考えればよいですか。

A 基本的にそのような状態は想定されません。思考・判断の見取りが確かならば、表現の見取りが不確かであると想定され、表現の評価を再考することが検討されます。しかし、「知識・技能」においては、身体的な理由などにより運動の技能はCと判断されるが、運動の行い方をよく理解しているなど、知識はA相当と判断できる児童がいることは想定されます。原則論にとらわれ過ぎず、様々な状況を踏まえて児童の学習状況を見取ることや、児童や保護者と評価の根拠について共有することが大切です。

Q 3 児童の学習カードでの自己評価が高く、教師の見取りとズレが大きい場合は、どのようにすればよいですか。

A 運動の行い方や体育の時間の過ごし方について、うまくイメージをもつことができない児童の場合、自分は懸命にやっているつもりなので、自己評価も高くなる傾向があります。その場合、未習熟な技能のまま高度な技能の習得に意識が傾き、事故などにつながる危険性もあります。このようなことを防ぐには、何がよくて「◎」と判断したのかを問い掛けたり、どのような動きや行動がどのような結果に結び付いているのかメタ認知させたりする必要があります。大事なものは感覚的な自己評価で終わらせず、教師による適切な言葉掛けや支援を行うことです。

参考文献

- ・ 国立教育政策研究所 『「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料 小学校 体育』 令和2年 東洋館出版社
- ・ 文部科学省 『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説体育編』 平成30年 東洋館出版社
- ・ 岡出 美則編著 『平成29年改訂 小学校教育課程実践講座 体育』 平成30年 ぎょうせい
- ・ 植田 誠治編著 『小学校新学習指導要領ポイント総整理 体育』 平成29年 東洋館出版社
- ・ 鈴木 直樹編著 『教師と子どものための体育の「教科書」高学年』 令和2年 明治図書